

ディレクターズカット版

薬事日報連載 第6回：「劇場型“イノベーション”に、心を削る」

株式会社 ChromaJean 代表取締役社長 三輪勝彦 2024.7.8

「この世はすべて、ひとつの舞台。男も女も、人はみな役者に過ぎない。」

僕は、胸の内でもう唱えてから、プレゼンテーションをはじめた。シェイクスピアの喜劇、「お気に召すまま」からの引用だ。

連載の最終回を迎えた。自身を賭けて取り組む業務を「宝石を売る」ことに例えるなら、そこに“宝石”があると相手に認識してもらえるストーリーづくりと、それを表現する“舞台”の設定について記す。「劇場型“イノベーション”に、心を削る」と題した。

中島みゆきさんの“糸”によれば、「逢うべき糸に出逢えることを 人は仕合わせと呼びます」とある。僕にも自身の人生を左右した重要な出会いが、いくつかあった。

ここでは、「宝石のつくりかた」と「舞台のつくりかた」の両方でヒントを与えてくれた、尊敬する研究者の話をしたと思う。

その研究者、ルー・ゼンさんとはタケダがサンディエゴにある企業を買収したことで、繋がりが生まれた。“ルー”と聞けば、どうしてもあの人を思い出すのだが、やぶからステイックにダジャレを言う人ではない。世界的に名の通ったクロマトグラファーである。

ルーさんが来日して、タケダで講演されたときの衝撃を今も忘れない。先端技術の開発に関する学術発表だった。だがむしろ、対極の位置にあるエンターテインメント性を強く感じた。彼らが開発したハードとソフトウェアによって、面倒なクロマトグラフィー作業が自動的に実行されて研究活動の渋滞を解消する、という痛快な物語だ。

「ああ、こうやって創薬研究は次のステージへ移っていくんだなあ。」と、ぼんやり感じたことを記憶している。研究者にとって、“宝石”のように価値のある技術だと思った。たかだかクロマトに限定した発表なのに、多くの研究者が魅了されていた。その日、観衆は演者・ルーさんによる劇場型“イノベーション”に心躍らせた。「この技術を取り入れたら、これまでの自分の仕事がラクになる」と直感させ、みなを“舞台”に引き込んでいた。

猛烈に自分が恥ずかしくなった。ハナっから発想のスケールで負けていたのだ。

当時の僕は、自身が持つ特殊技術に誇りを持っていたが、問題を解決できるのは僕のカラダが空いているときだけだ。その日の“頑張り”が、アウトプットに大きく影響する。

一方で、同じ仕事でありながらルーさんのチームが独自開発したシステムは、昼夜問わずにひたすら働く。文句も言わない。むしろ、金髪になってヤサグレたりはしない。

“提供する側のオレが凄い”ことに、別段の意味はなかった。“提供される側のアナタたちに凄いことをさせる”手段を提供するから、周囲を引き込むことができる。

この日を境に、「夫婦以外は何でも分ける」などと、与太話を吹聴するのはやめた。みんなが欲しがると“宝石”を提供する側になろうと思った。

今思えばルーさんとの出逢いが、僕自身が目指そうとする姿を“スペシャリスト”から、“クリエイター”に変えさせた。

そこからは、訓練方法を変えた。自分の知識欲のために論文を読み漁ることをやめた。“研究者が抱える、日々の重たい荷物を肩代わりする方法は何か”という目的で、切り口を探した。日中は、毎日の問題解決に忙殺されていたので、帰宅後にノートにアイデアを書き綴った。そして時々、ルーさんにメールで連絡してアイデアや悩みをぶつけた。それから僕らは、お互いのサイトへ出張するたびに情報を交換するようになった。ルーさんは、僕の下手な英語も我慢強く傾聴してくれた。進展があるたびに、自分のことのように目を細くして喜んでくれた。いつも力強い握手をしてくれた。

愚直に続けていくと、何となくだが目指す造形が見えてくるものだ。サイエンスだって、はじめはアートの才能が求められる。そのうち、僕はカタを掴んでいった。クロマト業務を自動化する中核技術を数式にして特許を取った。ノウハウを言語化してロジックツリーを作成することで、いつでも・誰でも・どこでも業務を遂行できる“仕組み化”を目指すようになった。このあたりから“クリエイター”としての手応えを感じ始めていた。

グローバル製薬企業タケダには、いくつもの研究拠点が存在した。あるとき、各研究拠点が持ちうる“傑出した技術”を選出し、グローバルで統一するというミッションが発令された。そしてクロマト業務の分野では、湘南サイトの僕がリーダーに任命された。さすがに「所長が、勝手に応募した」わけではなさそうだった。この大役を引き受けるかどうか迷った。うしろめたさがあったからだ。世界的に有名なルーさんの方が、この大役に相応しいのではないか。だから正直に告白した。生涯で、はじめての国際電話である。

「僕は、ずっとあなたに憧れてきた。あなたのようになりたかった。でも実際、まだまだ追いつけていない。経験も少ない。言語能力に自信もない。だから、今の僕がこのプロジェクトのリーダーを務めるのが、怖い。」

「心配いらぬ。私は、君をずっと見ていたよ。そして今、君はグローバル・タケダが誇るベストクロマトグラファーになった。君の野心と、並外れた努力がこのときを実現させた。だから、胸を張れ。君はもう、とっくに私を超えている。そのことがとても嬉しいよ、マイフレンド。」

こんなにも暖かい背中への押し方があることを、ルーさんからまた教わった。僕は、適切な感謝の言葉を懸命に探したが、見つからないまま途方に暮れた。そして落涙した。

タケダという大企業に在籍したからこそ経験させてもらえた、一流の研究者との素敵な出会いだった。生き方に大きな影響を与えてくれた人と出会うタイミングにも恵まれた。

たしか、あのときルーさんは僕に、「キープ・ユア・ヘッド・ヘルド・ハイ」と言ってくれたと思う。僕は「胸を張れ」と変換したが、感極まっていたから精度に自信がない。

ひょっとして、「お前、いつも頭が高いな！」と叱られていたらどうしよう。だとすれば僕は、叱られて泣いたことになる。この期に及んで無用な探求はよしておこう。

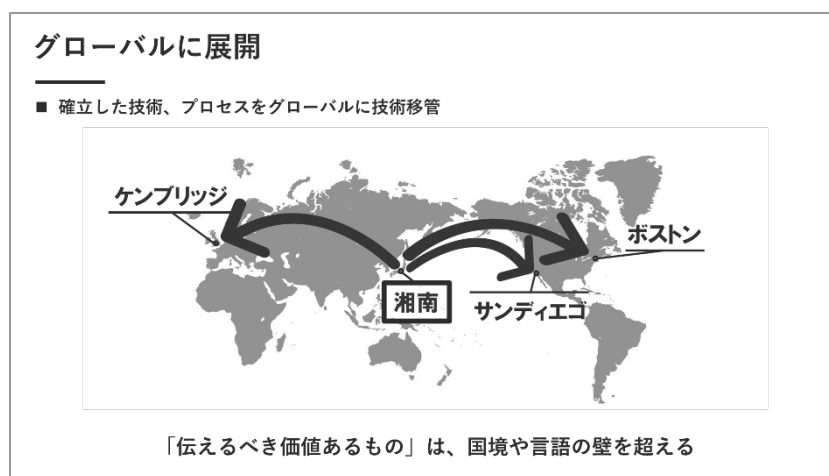


図1：湘南研究所・三輪の開発した技術をグローバルサイトへ移管する企画

残念ながらこのプロジェクトは、準備段階で中断され、実行されることはなかった。タケダにとって、世間を騒がす大きな機構改革が発表されたからだ。

日本におけるこの機構改革が発表されてから、すぐにルーさんから連絡を受けた。

「サンディエゴで働かないか？君なら大歓迎だ。また一緒に“イノベーション”の続きをしよう。君と私には、すべきことがまだたくさんあるだろう？」

かなり迷った。だが僕は、この機会にタケダの独立支援プログラムを受けて起業することを決めた。

ルーさんが僕に特別な思いを寄せてくれたように、僕にも大切に育ててきたメンバー達がいたからだ。ルーさんは、とても残念がった。でもそれからすぐに、またいつものように背中を押ししてくれた。

この世はすべて、ひとつの舞台。彼ら男女の役者と一緒なら、世の中に価値ある“宝石”を提供できる。そして、彼らのためにその“舞台”を整えてあげたい。

あの時感銘を受けた、ルーさんのような劇場型“イノベーション”を、信頼する仲間たちと一緒に仕掛けてみたい。そのために僕らは、持てる全てを賭して心を削る。これが、株

式会社クロマジーンの成り立ちだ。

「胸を張れ。」起業以来、僕は当社のメンバー全員に向けて、この言葉をかける。

クロマトグラフィーという学問あるいは業務は、たしかにマイナーだ。そんな分野で事業を始めても、その価値を謳い続けてもなかなか聞いてもらえない。気にも留められない。それでも謳い続けた。

仮にこの先、「お前ら、いつも頭が高いな！」と言われても、謳い続けるだろう。

我々はこれからもまた、世の中にロマンティックを届け続ける。



図2：プロセス化学会で招待講演を受けた帰りに、長崎空港でおこげ社長の似顔絵を入手

【了】